



新年のご挨拶

市立大津市民病院 院長 日野 明彦

明けましておめでとうございます。当院に着任して3度目の新年を迎えました。病院経営を軌道に乗せて後進に委ね、颯爽と勇退しているはずでしたが、やはりそう甘くはありませんでした。経営陣としての力不足を申し訳なく思っています。

この1年だけでも、当院を取り巻く環境は大きく変わりました。まず、世界を一変させたパンデミックがようやく終焉しつつあります。パンデミックでは、当院は県下唯一の第一種感染症指定病院として、軽症から最重症まで1万人近い患者さんを診てきました。誰も経験したことのない災厄に対して、当院が(従来の経営計画を変更し)手探りの中で人員や診療体制を整え、職員が一丸となって最大の成果を上げてきたことは、語り継がれるべき当院のプライドだと思います。大げさな表現で恐縮ですが、これは私の着任前の仕事ですから、むしろ客観的な評価だと思います。

現在の当院は、未曾有の超高齢化社会への医療対応に直面しています。パンデミックで創り上げた診療体制をまた造りかえる作業が必要ですが、カギになるのは、“多職種の専門家が連携したチーム医療”だと思います。高齢の患者さんは多岐にわたる身体的、心理的、社会的問題点を抱えておられることが多く、一人の主治医が一つの病気を治療する単純な医療では済みません。専門科や専門領域の壁を越えて関係者が知恵を出し合い、初診から退院後の生活に至るまで、一人一人の患者さんに向き合うことが必要になってきます。もちろん、病院外の医療/介護システムとの緊密な連携も重要になります。

こうした視点から、入退院センターを強化し、専門医による訪問診療システム、地域包括医療病棟、院外の介護施設や医療施設との連携システム、がんセンターなどを創設しました。今後も着々と必要な改革を進めてまいります。一方で、これらのシステムを活用し患者さんに満足していただくのは私たち職員の役目です。患者さん一人一人に出来るだけ気持ちよく帰っていただけるように、職員一同、力を合わせて頑張ります。

変わりゆく肝がん診療

消化器内科 医長 城 正泰



肝細胞がんは慢性肝疾患から発生する疾患で、以前はHCVを代表とするウイルス性肝炎が原因の第一でしたが、最近10年間でHCV治療の進歩もあり、その割合が減ってきました。一方で、いわゆる非ウイルス性肝疾患、特に生活習慣病や糖尿病などの代謝関連の脂肪肝による肝がんの割合が増えています。非ウイルス性肝疾患から肝がんの拾い上げは難しく、進行した状態で見つかることがあります。また、肝がんは根治治療後の再発も他の癌より多く、再発のパターンによっては根治治療が困難な場合もあり、こういった症例には、薬物療法が選択肢になります。

ガイドラインに記載されている肝がんの全身薬物療法は、殺細胞性抗がん剤ではなく、すべて分子標的薬か免疫チェックポイント阻害薬の組み合わせです。最近、主流になっているレジメンの治療成績は比較的良好で、進行がんも場合によっては、外科的切除やラジオ波焼灼療法などの根治治療にconversionできることもあります。また、従来行われてきたカテーテル治療（肝動脈化学塞栓療法や動注化学療法）と全身薬物療法を組み合わせることで、病勢制御しやすくなる症例も増えてきました。

ウイルス性肝疾患（HBV、HCV）で定期受診ができていない方（抗ウイルス療法がお済みの方も含みます）、生活習慣病が背景にあり肝障害（ALT 30 IU/mL以上）や脂肪肝がみられる方がいらっしゃいましたら、是非、当院消化器内科にご紹介ください。

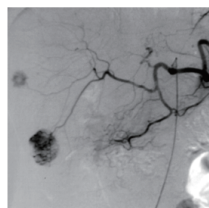
肝疾患 検査・治療(2023年度)	件数
腹部超音波検査(消化器内科)	2784
肝生検・腫瘍生検	14
局所療法(主にラジオ波焼灼療法)	21
血管造影・TACE・動注	23
肝細胞がん薬物療法(新規)	7

ラジオ波焼灼療法



画像引用元
Japan Lifeline ホームページ

TACE・動注

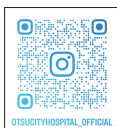


薬物療法

免疫チェックポイント阻害薬
分子標的薬
8種類のレジメン！

肝がん治療

Instagram



OTSUCITYHOSPITAL_OFFICIAL

HP



<https://och.or.jp/>

発行元

地方独立行政法人 市立大津市民病院
地域医療連携支援センター 地域医療連携室
Tel. 077-526-8192 (直通) Fax. 077-522-0192

業務時間

月～金曜日：午前8時30分～午後7時30分
土曜日：午前8時30分～午後12時30分